



勇気と信頼が生み出した奇蹟

校長 赤松 弘一

2022年もあと1週間となりました。コロナは終息するのか、ロシアのウクライナ侵攻はどうなるのか、他にも環境破壊や食料不足、国家間の対立など混沌としたまま年が暮れていきます。2023年こそ明るい兆しが見えることを切に願います。しかし嘆いてばかりいても仕方ありません。非常な困難に見舞われた時、それをどのように受け止めて乗り越えていくのか、そんな冒険者達のたどった軌跡を描いた物語を紹介します。冬休みに中学生のみんなに読んでほしいものです。

1つ目は「エンデュアランス号漂流」という実話です。1914年にイギリスの探検家 アーネスト・シャクルトン は、エンデュアランス号で28名の隊員と共に南極大陸横断を目指しますが、船は氷に閉じ込められ、やがて氷の圧力で押しつぶされて沈みます。28名はアザラシやペンギンを食べ、その脂肪をストーブやランタンの燃料としながら1年以上を浮氷の上で過ごします。やがてシャクルトン隊長と5名の隊員が小さなボートで助けを求めて荒れた海へ出ます。残された22名の仲間たちは隊長が救助に戻ってくるのを絶望的な中で待ち続けます。隊長のボートが荒海で沈んでしまっていたら永久に救助は来ません。ひたすら隊長を信じ絶望することなく生き抜く隊員たち。物語の結末は思わず胸が熱くなります。（*エンデュアランス=忍耐という意味）



2つ目の物語は「アポロ13号奇跡の生還」です。これも実話です。1970年4月に月面着陸を目指してサターン5型ロケットで打ち上げられたアポロ宇宙船は、酸素タンクの爆発で危機的状況に陥ります。月着陸どころか、地球への帰還も不可能と思われました。3人の飛行士を地球に生還させるために、NASAの地上の管制官たちは不眠不休で知恵を絞り、飛行士を支援しながら奇跡といえる帰還のミッションを成し遂げます。管制官たちと飛行士の信頼の絆、そして困難の中で最後まであきらめず、「俺たちは必ずできる」という強い信念があったからこそ成し得たのです。

生きていれば様々な困難に逢います。避けられるなら避けましょう。でも避けられないならば乗り越えるしかありません。その時に必要なのは前を向く勇気です。そして一人で立ち向かうのではなく、人を信頼し協力や助けを求めることが大切です。

3年生の皆さんは進路を固めて迷わず学習に励んでください。またコロナ対策もしっかりしてください。明日から冬休みです。課題をしっかりとやりながらも、学校や部活動から離れて、家族と楽しく過ごしてください。